

2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	ウィリアム・フォークナーの「語り手」の特異な振舞い —『墓地への侵入者』における登場人物と読者の情報格差について—
キーワード	①読者と登場人物の情報格差、②語り手の人格（人称）、③自由間接話法

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	オカダ ヒロキ 岡田 大樹
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	専修大学 文学部 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	専修大学 文学部 非常勤講師
プロフィール	1991年、神奈川県生まれ。2018年、専修大学大学院文学研究科博士後期課程を修了。言語という媒体にも障壁にもなりうる存在と人間の関係について、英米ゴシック小説の周辺を中心に、創作・翻訳・研究を通じて活動中。2022年、『フォークナーの『サンクチュアリ』再読／改稿——語り手の再編成』（春風社）を刊行。

1. 研究の概要

広く文学のテキスト解釈の場においては、すでに全体の通読が前提とされたテキストに対し、分析を施すことが主流である。またテキストというものの自体の在り方を理論化するナラトロジーの分野においても、「作者」や「テキスト」、「読者」や「語り手」といった諸要素を前提とし、その関係について階層構造を定位することが一般的であり、いずれもテキストを「静的な対象」として扱う傾向が強い。しかし、テキストというものは書かれ、そして読まれる際、かならず時間的な幅、空間的な線条性をもつ「動的な経験」として、私たちに対して現れるものである。いま読者がこの文章を読むために一定の時間をかけ、眼を左右に動かす必要があったとおりである。

報告者は20世紀アメリカのノーベル賞作家、ウィリアム・フォークナー（1897-1962）の小説を対象に、彼のテキストが読者に読み出されてゆく、その瞬間に起こっている意味生成の動的な様態を分析するよう努めてきたが、そのうち「テキスト」と「読者」のあいだで両者を媒介するものの、まるでブラックボックスのように立ち回る「語り手」という存在の振舞いについて、いまいちど再検証する必要性を感じるに至った。すなわち「読者」が「テキスト」を読み出してゆく際、「語り手」という存在は、どのようにして現象するものなのか。いま読者がこの文章を、ただインクや画素のランダムな配置ではなく、ひとまとまりの主張が徐々に開陳されるものとして受け取ることができる下地には、どのような出来事が起こっているのか。本研究はフォークナー作品の「語り手」の特異性を記述するため、まずこの「語り手」が現象する様態について分析し、その成果物として論文「語り手の人格についての試論」（『専修人文論集』110号）を刊行した。

2. 研究の動機、目的

報告者は創作・翻訳の実践経験から、人間と言葉の関係、とくに「作者」に書かれた「テキスト」が「読者」に読まれる際、三者のあいだで起こる意味生成の駆け引きの様態に、興味を

抱き続けてきた。現在この三者を媒介する「語り手」について、「作者」・「登場人物」・「読者」それぞれとの関係から分析を行なっている。

分析対象にはこうした関係性に意識的・自己言及的なゴシック小説を中心的に取りあげ、とくに現在はフォークナー作品を扱っている。これは『響きと怒り』(1929)、『八月の光』(1932)、『アブサロム、アブサロム!』(1936)といった代表作で「語りの実験」を極める彼の作品において、「語り手」の振舞いには一般的な小説とかなり異なった様態が見られるためである。

報告者は2020年度まで、上記の代表作に比べ注目度の低かった『サンクチュアリ』(1931)の「初稿版」と「改稿版」テキストを比較研究することで、本作の改稿が彼の30年代の作品における「語りの実験」のミッシング・リンクであることを論証した。

本研究は、この『サンクチュアリ』研究の延長線上にある。やはり従来は注目度の低かった『墓地への侵入者』(1948)に先の研究成果を応用することで、40年代におけるフォークナーの「語りの実験」の変遷について新たなモデルを提出し、また彼の特異な「語り手」の様態を考慮に入れることで、「作者」・「テキスト」・「読者」の関係を探る理論的研究に対しても、新たなモデルを提出することを目的として定めた。

3. 研究の結果

上記の目的の達成には、二種類の作業を行なう必要があった。『墓地への侵入者』の草稿研究を辿ることも必須ながら、同時に「語り手」という存在が読者に現象してくる発生の様態について、テキストを「動的な経験」として捉える立場から記述する必要がある。結果的に2021年度の研究は、この後者の作業に集中することとなり、その成果物として2022年3月発行の『専修人文論集』110号に、論文「語り手の人格についての試論」を発表した。また同3月に刊行された単著『フォークナーの『サンクチュアリ』再読／改稿』(春風社)にも、仕上げ段階で奨励金を頂戴した成果を一部、反映させることができた。当初の終点に想定していた『墓地への侵入者』論を完成させることは叶わなかったが、現在その理論編となった成果を踏まえ、執筆を継続している。

本研究の主要成果となった「語り手の人格についての試論」では、「語り手はテキストに内包される」という従来のナラトロジーの理解に対して、「読者が語り手を生成する」という立場を表明した。テキストの意味はインクや画素に内包されるものではなく、それを読む読者それぞれの「記憶」のなかで、「一貫した意味の流れ」に束ねられるものである(註1)。本研究ではこの「記憶」に生じるテキストの「一貫性を司る主体」を、「語り手」という「人格」なのだ指摘した。ナラトロジーは「語り手は生きた「人格」ではない」という立場を採るが、「人格＝ペルソナ」という語の由来を尋ねれば、この語はひとの言動の総体のうち「記憶」に残存したものだけが、「一貫した流れ」として事後的に束ねられたものを指している。つまり「人格」は各人の「記憶」に仮構されるものなのであり、「生きる人間」の自明の根拠ではないのである。

このように「語り手」を「人格」という構築物だと捉えることは、たとえば従来テキストの「一貫性」が破綻していると指摘されてきた箇所を、「語り手」の構築以前の地点、いま自由間接話法研究の場から「物語の本源的な力」の場として捉え直されている地点として捉え直すことを可能にするだろう。

(註1)たとえばこの註に飛ぶ指示を辿った読者と、そうせず最後にこの註を見つけた読者とは、それぞれの記憶するテキストの「意味の流れ」の連続性は、まったく異なるものになるだろう。

4. 研究者としてのこれからの展望

もちろん本研究の目標であった『墓地への侵入者』論の完成は急務である。しかし「人格」の語について調査するうち、ひとが他者を抑圧・迫害する際に「人間」と「非人間」の境界線を恣意的に分かつことで、自らを「人間」として正当化しながら他者を「非人間化」してゆく機序に、新たな視座を得るに至った。フォークナーについて考える際、もとよりレイシズムやセクシズムといった問題を避けて通ることは出来なかったが、「人格」の問題圏は「非人間化」が人種や性の領域に留まらないことを痛感させる。「人格」がひとに仮構される一貫

性の別の名であるならば、一貫性を表現し損ねる者は「非一人格化」され、すなわち「非一人間化」され得るだろう。認知症者のQOLといった問題をも射程に含める主題である。今後はこうした観点からフォークナーの「語り手」について議論を深めると同時に、より広い領域においても、言葉と人間のままたらぬ関係を掘り下げてゆきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究に奨励金を拝受したことで、とても実り多い研究を行なうことができたと考えている。遺憾ながら当初の最終的な目的まで到達することは叶わなかったが、「語り手」の生成を問ううち「人格」概念を掘り下げる機会を得たことで、一作家の草稿研究という微視的な専門と、ゴシック小説史という広域的な専門、幾年かギャップに悩み続けてきた両者を橋渡しすることができ、より太く束ねられた主題へと収斂させることができたと実感している。

「人格」の一貫性を人間の自明の根拠と定めたとき、人間という領域から疎外されてしまう者が生じてしまう。心を患ったまま亡くなっていった知人たちを呆然と見送ることしか出来なかった身にとって、この機序を言語化できたことは切実な進展だった。いまだ詳細な検討に付してはいないが、言葉と人間を媒介する「語り手＝人格」の問題は小説研究の領域に留まらず、当事者研究やナラティブ・アプローチといったケア／セラピーの分野にも接続され得るのではないかと期待している。